

# 学習能力障害児に関する事例的研究

## 一 退行的・代償的不当適応行動の原因追求の試み一

後 藤 駿 介

この研究は中学校における学習能力障害児の退行的・代償的不当適応行動の由って来る所以の追求を試みたものである。知能における性格的要素と親子関係の診断を経て、基本的欲求の方向を明らかにする過程で、不適応行動が対人関係の欲求阻止に起因する可能性があることを指摘している。学習能力障害児の学習指導にいくつかの示唆を与えている。

### I はじめに

教室のなかで、教師は40人もの子どもたちを相手に、教材や指導法をもとめて日夜悪戦苦闘している。飲み込みがはやく反応のよい子どもたち、多種多様な原因で「落ちこぼれ」ていく子どもたちなどを見ると、知能遅滞でも、情緒障害でも、言語障害でもない、勉強が遅れがちで、学習につまずきやすいタイプの子どもたちがいる。

「じっとしていることができず、絶えず動き回る」「落ち着きに欠け、注意の集中時間が短く、気が散りやすい」「特定の事物にこだわり、強い執着をみせる」「手先が不器用で、協応運動の悪さが目立つ」「ちょっとしたことにひどくうろたえ、やたらに緊張してしまう」などの特徴が共通に見られる子どもたちがそれにあたる。

学習能力障害児（LD）は、このような、多動性、転導性、保持性、不器用、情緒的不安定などの行動特徴をもつ子どもたちである。

さて、当教育センターには昭和56年度に2名、昭和57年度に1名、昭和59年度に1名の学習能力障害児が来談した。

学習能力障害は新しい分野でもあり、未知の部分が多いため、昭和56年度研究「学習能力障害児の理解と指導」では、解説を主に事例をとおして学校での扱い方を考察した。

昭和57年度研究「学習能力障害児の理解と指導」においては、事例の一つをとり上げ、学習レディネス・学力診断による指導・訓練仮説の設定を試みた。

昭和58年度研究「学習能力障害児の学力向上の手がかりを求めて」においては、国語・算数学力検査の誤答から見た学習指導上の留意点について考察した。

本年度は、中学校進学に伴い、退行的・代償的不当適応行動に悩むM児の原因追求を試みたい。

## Ⅱ 研究の目的

学習能力障害児の退行的・代償的不当適応行動の由って来る所以を追求し、望ましい人格の発達と精神的健康の維持増進に役立てる。

### 1. 知能と親子関係の診断

子どもの生活の中核となり、心のよりどころとなるものは親と子の相互関係である。子どもの不当適応行動がいかなる要因に由来するかを明らかにするために、知能の性格的要素や性格的特性の偏りを調べると同時に、親子関係における両者の感じ方や受けとり方の偏りにメスを入れる。

### 2. 基本的欲求の構造の解明

子どもの不当適応行動を理解するためには、まずその行動をひきおこし、方向づけ、推進しているものが何であるかということを理解しなければならない。不当適応行動を方向づけている基本的欲求の構造と方向を明らかにする。

## Ⅲ 研究のねらい

不当適応行動を知能の性格的要素と欲求の次元から分析することによって、行動の裏に働く力と行動の意味を明らかにし、学校における学習指導の改善に役立てる。

## Ⅳ 研究の方法

### 1. 知能における性格的要素の診断

長野県教育センターが考案したWISC簡易診断法を手がかりにWISC-R簡易診断法を工夫する。WISC-R知能検査は言話性と行動性の下位検査が交互に実施される点で以前のWISC知能診断検査と大きく異っている。したがって安易に簡易診断法に適用すべきではないが、ここではあえてWISC-R知能検査の下位検査の得点間の凹凸を全体得点の平均と比較して知能の性格的要素を診断する。知能の性格的要素に何らかの異常が認められれば、不当適応行動との因果関係を更に検討する。

### 2. 親子関係の診断

子どもの行動を正しく理解するためには、単に能力を測定するだけでは不十分である。親子関係診断テストを実施することにより、現在子どもがどのような相互交流関係にあるかを明らかにする必要がある。

### 3. 基本的欲求の構造と方向の解明

基本的欲求検査の実施により、子どものどのような欲求が、どのような場面で、どのような強さで存在し、不当適応行動とどう関連しているかを明らかにする。

## V 研究の実際

### 1. 事例 Mの概要

#### ア. 性別・年齢・学年

男子，13歳，中学校1年生

#### イ. 保護者の職業・続柄

会社員，父（長男）

#### ウ. 家庭状況

祖母63歳（パート），父41歳（会社員），母37歳（パート），本人13歳（中学校1年生），弟11歳（小学校5年生）

#### エ. 生育歴

本人の誕生前の母体は健康で，妊娠中も異常は認められなかった。

本人は初産児であり，熟産・安産で，3,300gで出生した。出産時に泣き声が聞かれず，助産婦が身体を軽くたたいた後に泣き声を発した。

乳児期は人工乳で育ち，4か月で離乳した。発育は普通で，8か月ではい始め，歩き始めは1歳2か月であった。

幼児期は幼稚園へ通ったが，知恵づきが遅く，言葉も片言で会話ができず，近所の友だちとも全然遊ばなかった。

家ではミニカーやブロックによる道路・橋づくりをすることが多かった。同じ遊びしかしらないことと物のおいをかぐくせがあることが心配だった。

小学校入学の直前の幼稚園時代にてんかん発作が出た。小学校入学後も数回発作が出たが，現在，病院の抗てんかん剤の投与により安定している。

児童期は小学校4年生までは，学習時はクラスの人々と同じことを全くやろうとせず，自分勝手ないたずらや私語をして過ごしていた。小学校5・6年生は学級担任の理解と協力により，やる気が出てみんなと同じことをしたいと，自分から要求をするようになった。学習中もよくノートをとるようになり，発言も少しずつふえ，たいへんよい方向にむいていた。

#### オ. 問題の状況

小学校時代に引き続いてMは母と共に来談した。中学校のホームルーム担任はMの得意とする教科である社会科の教師である。

障害の特性から国語・数学・英語の成績が振わず，Mの言語を借りれば中間や期末のテストは「地獄」という。ホームルーム担任によれば，社会科の成績はどうか中の下で10段階評価の5に位置しているが，不安定な要素もある。

授業中に発言はするがピントはずれのことが多く，他の生徒に「それがどうした？」と問いつめられ，返答ができずに四苦八苦する。

学級の生徒たちはMのことを知っているのである程度遠慮しているが、他の学級の生徒や上級生が教師の目の届かない場所でいじめたりする。

最近、学校で授業中にMはまつ毛や眉毛や髪を抜いたり、爪で頬に傷をつけたりしているのをホームルーム担任がよく見かけるといふ。

来談中のMの様子を見ると、視知覚促進学習に嬉々として取り組み、センターでは不当適応行動は全く見られない。

中学校へ行くようになってから時折涙ぐんで下校することがあり、小学校と違う教科担任制の学校生活にMが苦勞している気持ちが伝わってくると母は話している。

父母の希望としては、将来のことを考えると現在の通常の学級よりも特殊学級での教育がよいといふ。しかし、Mは特殊学級には絶対に行きたくないと一歩もゆずらない。

Mの今後の学校生活を改善するにはどうしたらよいかが母の相談の中心的事項になってきている。

2. 知能における性格的要素の診断

(1) 知能の性格的要素の分類

茂木茂八の研究を参考にWISC-R知能検査の下位検査問題を表1の5項目に分類した。

(表1) WISC-R下位検査の分類

項目	下位検査	言語性検査	動作性検査
A	機械的記憶	1 知識 11 数唱	
B	社会性推理	9 理解	4 絵画配列
C	論理性推理	3 類似 5 算数	
D	空間の分析総合		6 積木模様
E	理解の記憶	7 単語	

また、品川不二郎の研究を手がかりにWISC-R知能検査の下位検査項目の診断上の意義を表2のように分類した。

(表2) WISC-R知能検査の下位検査項目と診断上の意義

	検査内容 (実施順序)	観 点 (問題数)	診 断 上 の 意 義
言 語	(1) 知 識	常識的知識 30	◦ 常識問題であり、知識の量を調べることによって、知的能力を測る。
	(3) 類 似	類似性の抽象 17	◦ 類似性の抽象、共通性の発見などの推理力や論理的思考力をみる。



性 検 査	(5) 算数問題	応用問題 数概念 (18)	<ul style="list-style-type: none"> <li>数概念・数的推理, 抽象的思考の能力をみる。</li> </ul>
	(7) 単語	言語の理解 (32)	<ul style="list-style-type: none"> <li>単語を定義させる問題で, 事物や現象に対する理解力, 観察力, 表現力, 思考力, 概念構成の緻密さなどをみる。</li> </ul>
	(9) 理解	常識的理解 (17)	<ul style="list-style-type: none"> <li>常識的な判断がどの程度できるか, 実際の生活場面に対する判断力, 決断力, 処置責任などの能力をみる。</li> </ul>
	(11) (数唱)	機械的記憶 の把持 (14)	<ul style="list-style-type: none"> <li>数の順唱, 逆唱による数系列の直接記憶であり, 注意集中度や情緒安定度もみられる。</li> </ul>
動 作 性 検 査	(2) 絵画完成	絵の欠所発 見 (26)	<ul style="list-style-type: none"> <li>本質部分と非本質部分の識別力, 観察力をみる。注意集中度・観察の態度, 偏見や安定性などもみることができる。</li> </ul>
	(4) 絵画配列	筋道見通し のたて方(12)	<ul style="list-style-type: none"> <li>観察力, 比較力, 時間的順序の把握, 社会的事象の理解, 場面理解の力をみる。</li> </ul>
	(6) 積木模様	総合 分析能力(11)	<ul style="list-style-type: none"> <li>抽象的図柄の左右, 上下の弁別部分と全体との関係把握, 構成能力をみる。</li> </ul>
	(8) 組合せ	特殊な関係 の洞察力(4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>具体的な事物について, 切断部分から全体を構成させるもので, 見通しの能力, 構成能力などをみる。</li> </ul>
	(10) 符号	速度と正確 さ (1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>速度, 正確度の両面から知覚, 弁別, 手腕の器用さなどをみる。</li> </ul>
	(12) (迷路)	見通しの能 力 (9)	<ul style="list-style-type: none"> <li>迷路の場面における見通しの能力を, 速度, 誤謬, 試行錯誤などの分析によってみる。</li> </ul>

(表3) は(表1) と(表2) をもとにWISC-R 知能検査の知能の性格的要素を8つのカテゴリーに分類したものである。

WISC-R 知能検査の個人の得点(評価点)間の凹凸を, その個人の全体得点(評価点の合計)の平均(予想水準)と比較してみていくときに, これらのカテゴリーが手がかりとなる。

（表3）知能の性格的要素の分類

要 素	言 語 性 検 査	動 作 性 検 査
① 家庭的環境	1 知 識 7 単 語	
② 生活経験	1 知 識 9 理 解	2 絵画完成 4 絵画配列
③ 情 緒	5 算 数 (11 数 唱)	10 符 号 (12 迷 路)
④ 注 意 力	5 算 数 (11 数 唱)	2 絵画完成 4 絵画配列
⑤ 知 覚		2 絵画完成 6 積木模様 8 組合せ 10 符号
⑥ 巧 緻 性		10 符 号 12 迷 路
⑦ 洞 察 力		4 絵画配列 6 積木模様 8 組合せ (12 迷路)
⑧ 思 考 力	3 類 似 7 単 語	6 積木模様 8 組合せ

その個人の評価点の平均を予想得点の水準と考え、この予想水準から各下位検査の成績がどれだけ逸脱するかで知能の性格的特性をみることができる。

下位検査2つだけが使用されているカテゴリーでは+・-の許容範囲は1.5以内、4つ使用されている要素のカテゴリーでは3.0以内とする。したがってそれを上回る1.6, 3.1以上+・-両方に振幅のあるものについては、これを両向型Bとして+・-の数値を加えて、その振幅の度合でみる。

カテゴリーとしてとり出された性格的要素の中で得られた偏差値の平均値を出し、知能検査の中にあらわれている性格的要素の偏りがどの程度のものであるかをみる。

ここでは許容範囲を中心として一方向、+方向あるいは両向性として平均値が表わされる。

（表4）は知能における性格的要素における8つのカテゴリーを2つずつ組み合わせて、新たに4つの傾向に分類整理したものである。

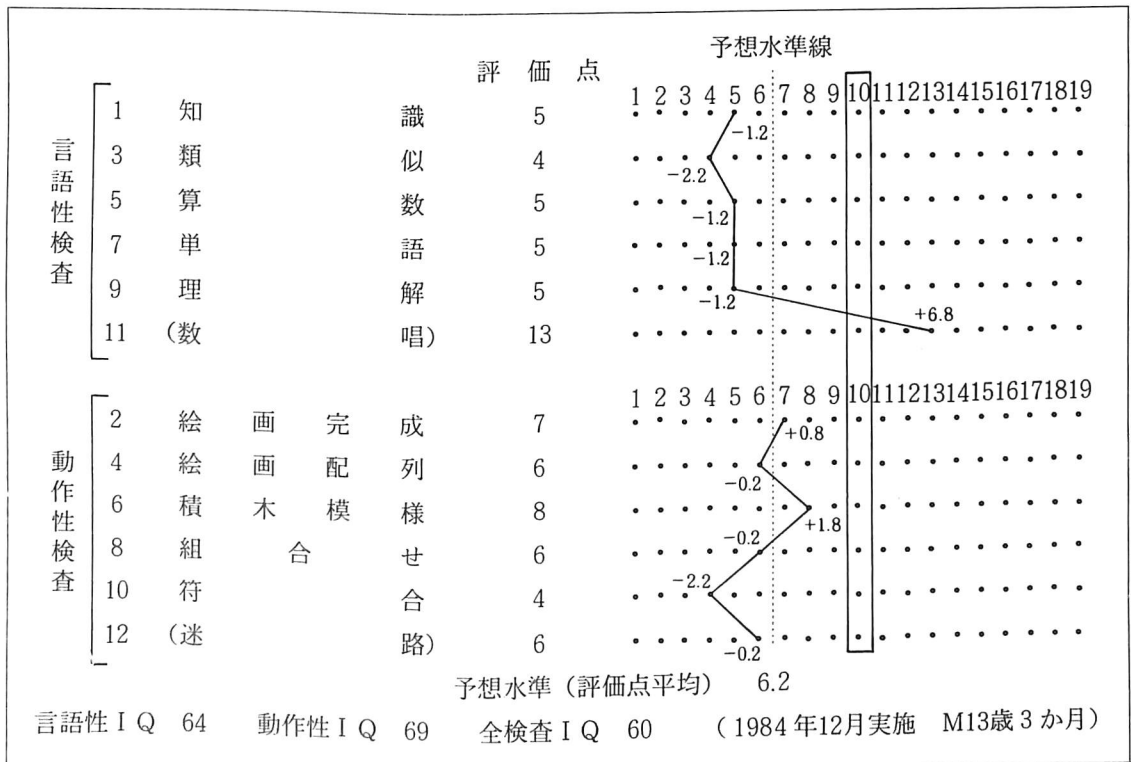
それぞれの平均値が許容範囲を越えて+方向にあるか-方向にあるかを表の上に図式化すれば、より端的に子どもの性格的要素の概要をみることができる。

ここで大切なことは、性格的要素を構成する4つの方向をささえる2つの要素が均等に働いているかどうかということである。

（図1）はMのWISC-R知能検査の結果とそのプロフィールである。

（表4）知能の性格的要素と傾向性

傾向性	性格的要素
(1) 社会性	① 家庭環境 ② 生活経験
(2) 気質	③ 情緒 ④ 注意力
(3) 作業能力	⑤ 知覚 ⑥ 巧緻性
(4) 判断力	⑦ 洞察力 ⑧ 思考力



（図1）MのWISC-R知能検査プロフィール

（図2）は（表1）（表2）（表3）（表4）と（図1）をもとに描いたMの知能の性格的要素を診断するダイアグラムである。

+・-の振幅が大きいものがBであり、むらがあり、非常に不安定であることを示している。

(2) 知能の性格的要素の考察

（図2）によりMの知能の性格的要素を考察すると次のようになる。

① 社会性

家庭環境と生活経験に問題はなく、社会性は普通である。

② 気質

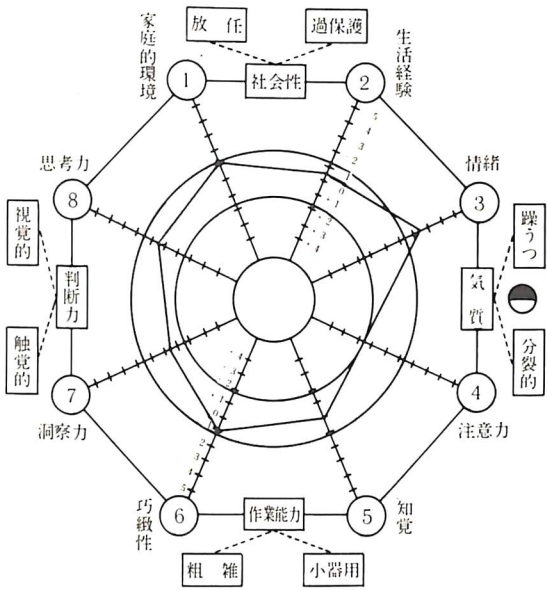
情緒が不安定で気質的にむらがある。

③ 作業能力

知覚と巧緻性のバランスがとれ、作業能力も普通である。

④ 判断力

洞察力と思考力のバランスもよく、判断力も普通である。



(3) 知能の性格的要素の診断

（図1）と（図2）によれば、Mは、知能段階はやや低いが、グラフは情緒面を除けば凹凸がなく、特に問題は認められない。

（図2）Mの知能の性格的要素診断ダイヤグラム

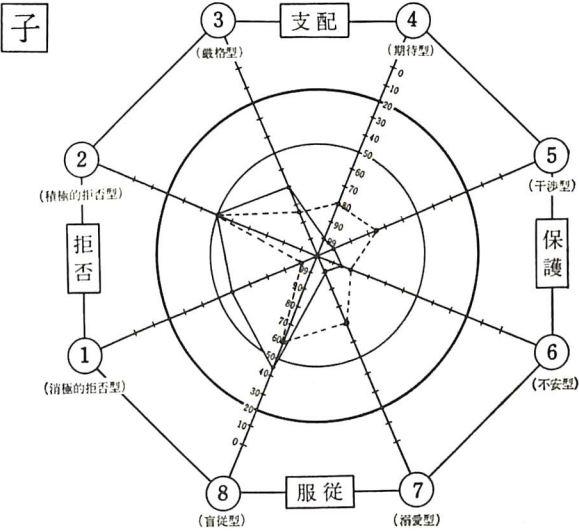
注意力がある程度あるにもかかわらず、気質的にはやや情緒不安傾向を示している原因はどこにあるのか明らかにする必要がある。家庭環境と生活経験には特に問題はないと考えられるが、念のために親子関係診断検査を実施することにした。

3. 親子関係の診断

父 …… 実線  
母 …… 点線

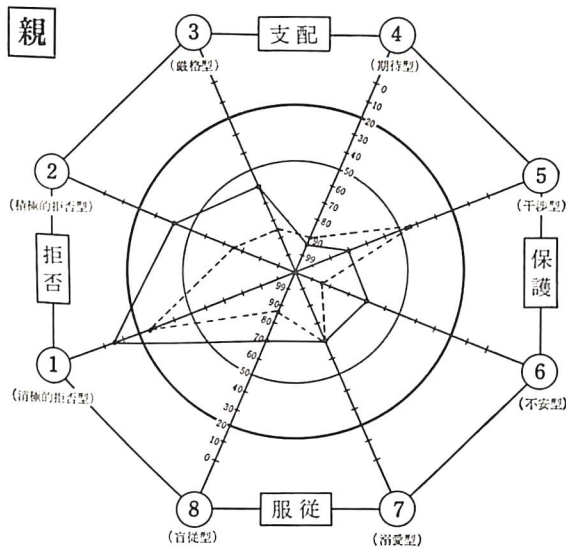
9 矛盾型		得点	パーセンスタイル
	父	20	99
	母	18	70

10 不一致型		得点	パーセンスタイル
	父	20	99
	母	18	70



（図3）田研式（生徒用）親子関係診断テスト・ダイヤグラム





父 ..... 実線

母 ..... 点線

9		得点	パーセンタイル
矛盾型	父	19	85
	母	16	30

10		得点	パーセンタイル
不一致型	父	20	99
	母	18	60

（図4）田研式〔両親用〕親子関係診断テストダイヤグラム（1985年1月 M13歳4か月）

（図3）はMからみた両親のグラフである。各項目ともMにとって両親の態度は問題ないと思われる。ただし、母親の矛盾の項目だけが危険地帯である。

（図4）はMに対する両親の態度のグラフである。父親は消極的拒否の項目だけが危険地帯にある。母親は危険地帯にはないが、やはり消極的拒否の傾向が認められる。

（図3）と（図4）をみる限り、Mのみる両親と両親のみるMとはほぼ一致しており特に問題はない。

（表5）Mの問題の徴候

		A 反社会性			B 非社会性			C 興味・意志			D 退 行			F 生活習慣											
		父	母	M		父	母	M		父	母	M		父	母	M									
M・両親からみた子どもの評価	1	乱暴、破壊粗暴			1	孤 独	2	1	1	1	劣 等 感		4	1	赤ん坊じみている 甘えん坊		1	1	食事の問題	1					
	2	非協調力がま	1	1	2	2	集団不参加	2	2	3	2	反省過剰感 罪悪感		1	2	ひねくれる すねる		1	2	衣服の問題		1			
	3	反 抗				3	ひっこみ 思案	1	2		3	興 味 欠 如	1	1	3	泣 虫 だっこ	1	2	3	睡眠の問題					
	4	悪かつげ	口口口		1	4	臆病、弱虫	1	1		4	無 気 力							4	清潔の問題		2			
	5	自己顕示欲	慢示坊			5	無 無 陰 表	口 現 気	1	1		5	計画性欠如	1		E 神 經 質 神 經 的 習慣 症			5	生活 態度	1	1			
	6	規則を守らない 不 作 法				6	子供らしさの 欠如				6	自律性欠如 依 頼 心	1	2				父 母 M	6	両親に対する 態度の差					
	7	無 責 任 約束を守らない		1	2	7	対人的不適応 対人技術欠如	1	3	1	7	忍耐力欠如 根 気 な し	1	1	2	1	神 經 質	1	G 学力・能力						
	8	残忍、同情心欠如、意地悪 自己中心			1						8	注 意 散 漫 落 着 な し	1	1		2	2	神 經 的 習慣	1	3	1	学 業 不 振	1	4	
	9	出しゃばり おせっかい														3	3	神 經 症 的 徴 候				2	学 習 嫌 悪	1	2
	10	非行、うそ、盗み、性的非行、利己心			1																	4	学 業 不 安 学 業 劣 等 感	1	

（表5）はMの問題徴候を7大別し、さらにそれを適度にグルーピングしたものである。

両親がそろってMの欠点を指摘し、その結果としてMもその欠点を自覚しているものとして、集団不参加、非協調、非協力、わがまま、孤独、対人的不適応、対人技術欠如、忍耐力欠如、根気なしなどがあげられる。

母親の指摘でMが強く自覚しているものに劣等感があり、父親の指摘でMが強く自覚しているものに神経的習慣、学業不振、学習嫌悪などがある。

両親とMが共通に指摘・自覚しているこれらの問題徴候をみると、いずれも学校生活に関するものが多い。このことは、Mの学校生活について何らかの問題があり、それが両親にMの欠点を指摘させる結果となっていると考えられる。

学校におけるMの問題が何なのか、また問題を引き起こしている心理的背景が何なのか、Mの主観的認知のレベルにメスをいれるために基本的欲求の面から分析することにする。

#### 4. 基本的欲求の構造と方向の解明

基本的欲求検査（1985年2月 M13歳5か月）の結果をいくつかの観点から考察してみたい。

ここで基本的欲求として取り上げるものは次の9種類の欲求である。

##### (1) 愛情の欲求

両親、教師、隣人などから愛され、多くの注意を払われ、彼等と共に楽しい時間を持ちたいという欲求

##### (2) 成就の欲求

家庭、学校、社会のいろいろな場面において、自分の目標に到達したり、成績を向上したり、他人に負けたくないだけの力をもちたいという欲求

##### (3) 所属の欲求

集団に所属して多くの友人を持ち、人々と仲良くしたいという欲求

##### (4) 独立の欲求

他の人から情緒的物質的援助を受けなくても、独立し自主的に物事を決定し、自己統制ができ、責任と義務を果たしたいという欲求

##### (5) 経済的安定の欲求

金銭についての悩みから解放され、両親や同胞が確固たる仕事を持ち、病気や災害のとき困らないだけの経済的安定を得たいという欲求

##### (6) 社会的承認の欲求

家族、学校やその他の集団の一員として、有利であり、重要であると承認されたいという欲求

##### (7) 恐怖及び侵害を避ける欲求

夢の恐怖、荒っぽい競技の恐怖、教室で返答する恐怖、唯一人いる時の恐怖、刑罰に対する恐怖から解放されたという恐怖

##### (8) 罪を避ける欲求

人をだます、けんかをするなど、いろいろな悪行の罪悪から解放され、罰せられるようなことをしたくないという欲求

##### (9) 社会的見解の欲求

探索、好奇、発明等に関係し、未知のことがらを知り、知見をひろめたいという欲求

これらの9種類の欲求の中には、相互に似よりの高いものもあり、一つの欲求が他の欲求と密接に関連していて、完全に独立したものとして分類することが困難なものもあるが、現実の場面における欲求

の現われをよく見るために、別々のカテゴリーとして取り上げている。

（表 6）Mの基本的欲求の範囲（数字は得点を示す）

欲求の種類 場面	(1)愛情 の欲求	(2)成就 の欲求	(3)所属 と参加の 欲求	(4)独立 の欲求	(5)経済 的安定の 欲求	(6)社会 的承認の 欲求	(7)恐怖 及び侵害 を避ける 欲求	(8)罪を 避ける欲 求	(9)社会 的見解の 欲求	合 計
家 庭		1.0		1.0	1.0	1.0	3.0	2.0	2.0	11.0
学 校	2.0	2.0	1.0	2.0	1.0	1.0	3.0	2.0	2.0	16.0
社 会		2.0			1.0	1.0	1.0	3.0	1.0	9.0
合 計	2.0	5.0		3.0	3.0	3.0	7.0	7.0	5.0	36.0

（表 6）はMの基本的欲求がどの範囲にわたって存在するかを表わしている。

欲求の種類をみると、恐怖及び侵害を避ける欲求と罪を避ける欲求が最も強く、非常に関心が高いといえる。これに対して、所属と参加の欲求は、極めて低く、現状では関心が殆んどないと考えられる。

また、基本的欲求の場面をみると学校でのものが最も強く、非常に関心が高いことを示している。これに対して、社会場面への欲求は弱く、現状では関心が殆んどないと考えられる。

（表 7） 基本的欲求の強さと順位（数字は中学 1 年生男子とMの得点を示す）

欲求の順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9
中学 1 年 生の欲求 の種類	罪を避け る欲求 (5.9)	成就の欲 求 (6.1)	独立の欲 求 (4.3)	恐怖及び 侵害を避け る欲求(3.9)	所属と参 加の欲求 (3.7)	社会的承 認の欲求 (3.7)	経済的安 定の欲求 (3.6)	愛情の欲 求 (2.8)	社会的見 解の欲求 (1.6)
Mの欲求 の種類	恐怖及び 侵害を避け る欲求(7.0)	罪を避け る欲求 (7.0)	社会的見 解の欲求 (5.0)	成就の欲 求 (5.0)	独立の欲 求 (1.0)	社会的承 認の欲求 (3.0)	経済的安 定の欲求 (3.0)	愛情の欲 求 (2.0)	所属と参 加の欲求 (5.0)

（表 7）は基本的欲求の強さと順位を表わしている。

基本的欲求の強さをみると、Mは恐怖及び侵害を避ける欲求と社会的見解の欲求がかなり強いのに対し、所属と参加の欲求が特に弱い。

次に、どの欲求が最も高く、何が最も低いかという順位をみると、恐怖及び侵害を避ける欲求が、一般的に中学 1 年生では第 4 位なのに対し、Mは第 1 位になっている。このことは、何かの原因でMの恐怖及び侵害を避ける欲求が異状に強いことを意味し、注目しなければならない。

また社会的見解の欲求は一般的に中学 1 年生では第 9 位なのに対して、本人は第 3 位になっている。このことは、Mが社会科の教科学習に興味関心があり、積極的に学習していることとも関係しているものと思われる。

（表 8）は、学校におけるMの基本的欲求の具体的内容を示している。欲求の内容をみると、対人関係に関するものが多く、学校生活におけるMの欲求の強さを物語っている。これらはMの主観的な考え



ではあるものの、学校におけるMに対する主観的認知レベルでの生徒理解の必要性を表している。

（表8）学校におけるMの基本的欲求の内容

<p>第1位 恐怖及び侵害を避ける欲求</p> <p>① 学校で友だちからいじめられないようにになりたい。</p> <p>② 先生にびくびくしないようにになりたい。</p> <p>③ 学校で先生から叱られないようにになりたい。</p>	<p>第2位 罪と避ける欲求</p> <p>① 先生がいなくても、まじめに勉強したい。</p> <p>② 学校の友だちから借りたものは必ずかえしたい。</p>	<p>第3位 社会的見解の欲求</p> <p>① 先生や目上の人に対して、なぜ丁寧な言葉をつかわなければならぬか、そのわけを知りたい。</p> <p>② なぜ学校の帰りに道草や買いぐいをしてはいけないのか、そのわけを知りたい。</p>
<p>第4位 成就の欲求</p> <p>① 学校の成績がもっとよくなるようにしっかり勉強したい。</p> <p>② 野球やスポーツがもっとじょうずにできるようになりたい。</p>	<p>第5位 独立の欲求</p> <p>① 学校で上級生から、小さいものの扱いにされないようにになりたい。</p> <p>② 学校で勉強などがわからなくなったとき、人にたよらずに自分で考えてやりたい。</p>	<p>第6位 社会的承認の欲求</p> <p>① 友だちが自分のしていることは、いつも正しいと思うようにになりたい。</p>
<p>第7位 経済的安定の欲求</p> <p>① 学校に寄付できるくらい自分の家に金があればよい。</p>	<p>第8位 愛情の欲求</p> <p>① 学校でひとりでもよいから、ほんとうによい友だちをもちたい。</p> <p>② 学校の友だちに好かれて、人気があればよい。</p>	<p>第9位 所属と参加の欲求</p> <p>① ひとりで組の仕事をするよりも、みんなでわけあってやりたい。</p>

## VI 研究のまとめ

学習能力障害児Mが学校で授業中にまつ毛や眉毛や髪を抜いたり、爪で頬に傷をつけたりするなどの退行的・代償的不当適応行動を繰り返す原因は次のようにまとめることができる。

- ・ 知能の性格的要素を診断した結果、情緒不安定であり、気質的にややむらが認められる。
- ・ 学校では学業不振からくる劣等感が強く、集団になじめず、神経的習慣が認められる。
- ・ 学校で対人関係に関する基本的欲求が充足されず、欲求阻止（フラストレーション）現象を起こしている。したがって、心の中に強い緊張が生じ、これらの緊張を解消するために、退行的・代償的行動によって不当適応し、一応の目標に満足しているものと思われる。

## VII おわりに

小学校高学年では学校生活によく適応していた学習能力障害児Mが中学校進学と同時に退行的・代償的不当適応行動にはしるようになったのはなぜか。学校と常に密接な連絡をとりながらMが安心して学習できる学校生活の条件づくりに教育相談担当者として側面からさらに努力していきたい。

## 参 考 文 献

- 1) 日本版 WISC - R 知能検査法 1982年 修正版 日本文化科学社
- 2) 研究年報 第4集 昭和44年度 長野県教育センター